山形大学歴史・地理・人類学論集、第十三号、91－98頁、二〇一二年

広開土王碑「山形大学本（第Ⅲ面）」調査概報

Investigation report about the rubbed copy（Yamagata University possession）of the stone monument of Gwanggaeto the Great（広開土王）

武田幸男
TAKEDA Yukio

【キーワード】高句麗　広開土王碑　石灰拓本
Key words :Goguryeo, the stone monument of Gwanggae to the Great, the rubbed copy

(1)「山形大学小白川図書館本」（以下、「山形大学本」と略称する）の拝観情報。二〇一一年八月四日、橋本繁氏より、近日中、高句麗広開土王碑「山形大学本」を拝観する機会に恵まれる由、山形大学人文学部准教授三上喜孝氏から連絡を受けたことを知る。

(2)「山形大学本」の調査。同年九月二七日、三上喜孝氏と山形大学小白川図書館関係者の協力をえて、橋本氏とともに「山形大学本（第Ⅲ面）」を熟覧し、拓本の現状、石灰の塗布状況や着墨状況、用紙法などについて調査し、拓本の類型や制作時期などについて検討する。

(3) 拓本の性格。当該拓本は広開土王碑の石灰拓本。拓本の全面にわたって石灰が塗布され、石灰で加工したり、ふたたび修復された多数の文字が認められる。つまり、典型的な石灰拓本である。

(4) 拓本の現状。拓本は表装本。もと四面碑・四幅が存在したはずであるが、第Ⅲ面一幅のみ現存し、第ⅠⅡⅣ面は欠如する。拓本は縦五三一・七×横一七四・六センチ。表装本、軸装一幅、縦五六一×横一七八センチ、軸長一八六センチ。着墨時用紙の層数は不明。拓本の左右両端の縁取りは黄紙、巾一・五～二・〇センチ。保存状態はおおむね良好。ただし、拓本の処々に拓出時についた小さな破損の跡が認められる（補修痕はない）。また軸装上部に、小さな亀裂や破損痕が見うけられる（現在補修済み）。

(5) 図表1「「山形大学本」拓影（第Ⅲ面）」の提示。

(6) 調査概報の作成。「山形大学本」に関する調査資料を整理し、考察を加えて、同年一〇月一〇日に本稿「広開土王碑「山形大学本（第Ⅲ面）」調査概報」を作成する。なお、後日、三上氏から貴重な意見が寄せられ、その主旨に従って補筆した。ここにその旨を記して感謝する。

(7) 拓本の発見と来歴。当該拓本は二〇一一年七月三〇日、戦前に使用された教育用掛図などとともに、図書館の書庫において発見し

←ポイント④
（右側上部の
空白部分）

←ポイント⑤
（右側中部の
空白部分）

←ポイント⑥
（右側下部の
空白部分）

図表１　「山形大学本」拓影（第Ⅲ面）

たものである。拓本の受入記録類は存在せず、また拓本の来歴をうかがわせる題記・跋文なども見当らない。

二、「山形大学本」の類型

(1) 拓本類型と「着墨パターン法」。石灰拓本の性格を明らかにするには、拓本の着墨状況（着墨されていない「空白部分」の拡がる状況）に着目し、それを「着墨パターン法（6ポイント）」と照合して拓本の属する類型を判定する。それが基本的な基礎作業である。加えて、拓本の着墨状況や用紙法を調査し、それらを総合的に考察して判定することが望ましい。「山形大学本」の類型が判定されれば、それに対応して制作年代を推定することが可能になり、拓本制作史上の時系列的な位置づけが明らかになる。

(2) 図表2 「「石灰拓本」類型着墨パターン対照表（増補版）」の提示。

(3) 「着墨パターン対照表」との照合。当該拓本の着墨パターンは、図表2と照合して判定する。ただし、「山形大学本」は第Ⅲ面だけなので、照合できるのは全六ポイントのうちポイント④⑤⑥に限られる。ポイント①②③は照合できないが、それは拓本の性格を明らかにするさい大きな障害になるであろう。

ちなみに、照合にあたって注意したいのは、一つは、拓本制作者が無視した第Ⅲ面第1行を必ずカウントすることである。二つは、字格数をカウントするとき、図表2に付記した「＊字格の数え方」を参照することである。

(4) ポイント④の照合。当該拓本（第Ⅲ面）右側・上部の着墨されなかった空白部分、即ちポイント④は、拓本の向かって右端の第1行から第6行か第7行あたりまで着墨されず、連続して空白部分が認められる。その部分は図表2の規定「連続7行以下」に該当し、従って拓本は【C2型】類型に属すると判定される。

(5) ポイント⑤の照合。拓本右側・中部の空白部分、即ちポイント⑤は、右端から数えて3行連続する。それは【C1型】の規定「連続3行」と、【C2型】の規定「連続3行以下」とを許容する。従って、類型を特定するには至らない。

(6) ポイント⑥の照合。拓本右側・下部の空白部分、即ちポイント⑥は、不定多角形の独特の様態を示して、左右7行×上下9字格の範囲に展開する。それは【C2型】の規定「連続7行以下×10字格以下」に該当する。見方によっては、第32字目の下半分に掛かる空白部分に着目し、あえてカウントすることもありえよう。しかし、いずれにしても、連続する空白部分の字格数は上下10字格にとどまり、【C1型】の規定「×11字格以上」に達しない。

(7) 当面の類型判定。以上において逐一照合した結果、三ポイントに共通するのは【C2型】類型だけである。「山形大学本」はさしあたり、【C2型】類型に属する拓本と判定される。これは当該拓本にとって基本的に重要なことである。しかし、その他の三ポイントについては照合できず、【C2型】の下級類型つまり【C2―1型】か、【C2―2型】か、【C2―3型】かは特定できなかった。

当該拓本の限定的な情況からみて、【C2型】の下級類型を追求し、判定する課題はかなり困難であると思われる。ひき続いて、用紙法

や着墨状況について調査し、各種の石灰拓本と照合比較して、できるだけ当該拓本の類型問題、性格問題に接近してみよう。

三、「山形大学本」の用紙法

(1) 基本用紙の「継ぎ貼り法」。石灰拓本の一般的な製作法は湿拓法により、各面に一枚の大きな用紙を充てて拓出する。各面を覆う大きな用紙は、碑面に小さな紙（基本用紙）を充て、それらを継ぎ貼りして作成する。それを用紙の「継ぎ貼り法」という。継ぎ貼りの順序は、拓出者の手慣れた手順に従って、まず、各面の上段から下段へ継ぎ貼りし、格段においては左側から右側へ、あるいは右側から左側へ貼りすすむ。

(2) 上下一一段の構成。「山形大学本（第Ⅲ面）」の場合もまた上段から下段へ継ぎ貼りし、上下一一段で構成する。一一段で構成された石灰拓本は、【C2型】類型に属する当該拓本を含めて、【C2—3型】拓本の「梶本益一本」（九州大学図書館本）、「内藤確介本」（目黒区本）が知られている。

それに対して、九段構成の【C1—2型】拓本や【C2—1型】拓本が存在する。確認された限りで、前者には「関野貞本」（東大建築学科本）、「関野貞旧蔵本」、「今西龍本」があり、後者には「多胡碑記念館本」が挙げられる。それらは一一段の「山形大学本」や【C2—3型】拓本と大きく相異する。これは注目すべき相違点である。

ただし、いまのところ、時系列からみて「山形大学本」に近似するかと想定される【C2—2型】類型の拓本、即ち【C2—1型】類型と【C2—3型】類型との中間に位置する類型の拓本の段数構成は知られていない。

(3) 基本用紙の様態。もうひとつ注目すべきは、基本用紙の大きさとその形状である。「山形大学本」の基本用紙は、一辺平均が約52センチの正方形である。現在知られるところでは、前記した【C2—3型】の二拓本と同じ大きさ、同じ形状のものである。それに対して、当該拓本に先行する【C1—2型】や【C2—1型】の拓本は

図表２　「石灰拓本」類型着墨パターン対照表（増補版）

	第Ⅰ面	第Ⅱ面		第Ⅲ面		
ポイント	①	②	③	④	⑤	⑥
C0型						
C0—1型	（全ポイント着墨）					
C0—2型	（不着墨ポイント一つ以上）					
C1型	連続または連続・不連続7行以下	連続3行×11字格以下	連続2行以下×6字格	連続9行	連続3行	連続7行×11字格以上
C1—1型 C1—2型 C1—3型	連続4行 連続5行 連続・不連続7行					
C2型	連続9行以下、連続・不連続7行以上	連続2行以下×5字格以下	（着墨）	連続7行以下	連続3行以下	連続7行以下×10字格以下
C2—1型 C2—2型 C2—3型	連続・不連続7行 連続・不連続8行 連続9行以下、連続・不連続11行（右端まで）	連続2行×5字格 連続2行以下×5字格 連続2行以下×5字格以下				
C3型	連続9行以下、連続・不連続11行（右端まで）	連続2行以下×4字格以下	（着墨）			

＊字格の数え方…当該ポイントの範囲内で、別行かどうかに関係なく、最上の位置を占める字格から最下の字格までの合計数。ただし、第Ⅲ面（ポイント④⑤⑥）については、第1行の字格は数えない。

おおむね66×37センチの長方形である。前者と後者には大きな違いがある。ただし、基本用紙の様態に関しても、これまで【C2—2型】拓本の調査結果は報告されていない。

(4) 基本用紙の調整法。ところで、継ぎ貼り作業のなかで、拓出者は基本用紙を碑面の大きさや形状に合わせて適宜裁断し、調整する必要に迫られる。「山形大学本」の場合は、上下両端については通例に従って最下段で調整し、左右両端は右端で調整した。

一般的な事例によれば、各段において左端で調整する場合は、その反対側の右端から貼り始め、右端で調整するときは、左端から貼り始める傾向が認められる。当該拓本の継ぎ貼り作業の手順もまた、そのような一般的な傾向に従って調整したようである。

(5) 用紙法と類型問題。以上に指摘した用紙法、特に基本用紙の大きさや形状、継ぎ貼り法の段数構成を通じて、当該拓本が【C2型】類型に属することを改めて追認することができた。また、【C2型】類型に属する拓本のなかで、当該拓本は【C2—1型】拓本よりも【C2—3型】拓本に近似することが示唆された。しかし、ここでは、資料不足の【C2—2型】拓本は調査例がないので、その可能性を残しておくことにする。

四、「山形大学本」の着墨状況と石灰碑字

(1) 一般的な着墨状況。碑面に塗布した石灰は、石灰拓本を拓出するたびに少しずつ剥落したようである。その状況は、「山形大学本」の字画の周辺に浮き出た多数の小白点や、行間の一部にかすかに見え始めた白い縦線などで確かめられる。そのような着墨情況は、すでに石灰剥落期に入った【C2型】拓本に共通する一般的な特徴である。さらにいえば、石灰が剥落し、変化し始めた状況は、同じ【C2型】拓本の中でより新しく拓出された拓本、つまり【C2—2型】拓本や【C2—3型】拓本により一層近似すると思われる。

(2) 「*論」の字形の変遷。着墨状況に関連して、人々が関心を寄せてきたのは晴朗明晰に拓出された碑字であり、それはやがて石灰拓本の石灰文字によって実現された。しかし、やがて【C2型】拓本の石灰文字は、拓出するたびに石灰が剥落し、しかもそれらを石灰で再び補修したものである。「山形大学本」の石灰文字も、もちろん例外ではない。

石灰文字の中で、かねてより注目してきたのが、第Ⅲ面第2行の「*論」字〔Ⅲ02—19〕である。広開土王碑墨本が制作されて以来、それはほぼ一貫して「朝」字と誤釈され、継続して加工された石灰文字であり、その文字の拓出状況は石灰の剥落や補修につれて次第に変化する。拓本類型の時系列に従って、その変遷状況を図示してみよう。

(3) 図表3「類型別墨本の第Ⅲ面「*論」字変遷図」の提示。

(4) 類型別拓本の「*論」字の比較。「山形大学本」の当該「*論」字の類型別による通時的な拓出状況の変遷は、図表3を一覧して確かめることができる。

【A型】(原石拓本)…風化して模糊朦朧となった碑面の「*論」字を拓出する。

【B型】(墨水廓填本)…誤釈した「朝」字を明晰晴朗な点画で

手書きする。

【C0—1型】（以下、みな石灰拓本）…字格全面に石灰を塗布し、全面模糊たる「朝」字に加工して、少々淡墨で拓出する。

【C1—1型】…字格全面に石灰を塗布し、明晰な「朝」字に加工して、濃墨を以て拓出する。

【C1—3型】…塗布した石灰が少々剥落し、「朝」字の周囲に小白点が現われる。

【C2—1型】…石灰がさらに剥落し、「朝」字の周囲に多数の小白点が現われる。

図表3　類型別墨本の第Ⅲ面「論*」字変遷図

釈文位置	論* Ⅲ02—19
原石拓本 A型 水谷悌二郎本	
墨水廓填本 B型 酒匂景信本	
石灰拓本 C0—1型 韓中博淡墨本	
石灰拓本 C1—1型 学習院大乙本	
石灰拓本 C1—3型 金沢大図書本	

釈文位置	論* Ⅲ02—19
石灰拓本 C2—1型 韓中博剪装本	
石灰拓本 C2—1型 大平山濤本	
石灰拓本 C2—3型 梶本益一本	
石灰拓本 C2—?型 山形大学本	
石灰拓本 C3型 書学院本	

【C2—3型】…石灰がさらに一段と剥落し、「朝」字の「月」画の上部に或る種の変化が現われる。

【C2—?型】（山形大学本）…（上記の【C2—3型】に酷似する）

【C3型】…石灰の大部分が剥落し、「朝」字の字格全面に無数の小白点が現われる。

(5)【C2—3型】拓本の相互比較。当該文字に現われた「或る種の変化」とは、石灰剥落の進展により、通常「月」画の上部に現われる。そのなかでとくに目立つのは、「月」画の左上に、異様な「卜」形の細い白線が現われたことである。また、石灰を塗布して補修した結果、「月」画の右上角の「冂」部分が消滅した。

あらためて調査してみると、同じ【C2—3型】拓本にも、例えば(a)「卜」形が認められるもの、(b)認められないものが併存する。(a)には「梶本益一本」「東京大学東洋文化研究所本」「東京大学文学部考古学研究室乙本」が属し、(b)には「京都大学人文研究所本」（小白点が現われる）、「鈴木宗作本」（ごく短い縦線が現われる）、「内藤確介本」（ごく短い横線が現われる）が含まれる。同類型の拓本に(a)群と(b)群とが併存するのは、石灰の塗布（残存）状況や補修状況が四～五年間（五(5)を参照）、つねに同じ程度に保たれていなかったからであり、拓出時期が多かれ少なかれ各々前後していたからであろう。

(6)【C2—3型】拓本との近似性。注目したいのは、「山形大学本」の当該文字が(a)群に共通する異様な石灰剥落痕を示すこと、そのような剥落痕が【C2—3型】以外の拓本には見られないことである。

それは当該拓本が【C2—3型】類型にかなり近似することを示唆している。あえて酷似していると評しても、大きな過ちではないであろう。

(7) 酷似する「梶本益一本」。すでに指摘したとおり、「山形大学本」はポイント④⑤⑥の着墨状況や用紙法、また「*論」字の字形の変化などを総合して、【C2—3型】拓本にかなり近似するとみてよかろう。とくに着目したいのは、【C2—3型】拓本でも当該拓本に酷似する「梶本益一本」である。その制作年次は、かつて長正統氏が綿密に調査検討して、すでに一九二七年（昭和二年）頃の拓出と判定されている。

図表４　「広開土王碑」拓本類型・編年表

類型　　・制作時期	類型　　・制作時期
C0型　　・1890年代前半	C2型
C1型	C2—1型・1922年前後～
C1—1型・1895年前後～	C2—2型・1922年前後～
C1—2型・1803年前後～	C2—3型・1925年前後～
C1—3型・1912年前後～	C3型　　・1935年前後～38年頃

五、「山形大学本」制作時期の推定

(1) 制作時期の推定。「山形大学本」の制作時期は、その属する類型に基づいて、さしあたり図表４に照らして推定する。

(2) 図表４「「広開土王碑」拓本類型・編年表」の提示

(3) 「梶本益一本」とほぼ同じ場合。「山形大学本」の着墨状況と用紙法は「梶本益一本」と酷似する。これを重視すれば、両本はほぼ同じ時期、つまり一九二七年頃に拓出された可能性が少なくない。これが「山形大学本」制作時期に関する第一案である。

(4) 【C2—3型】の場合。「山形大学本」は【C2—3型】に属する可能性が相当高いと思われる。その場合、図表４により、当該拓本は一九二五年前後から一九三五年前後まで、およそ前後一〇年間に拓出されたと推定される。これがかなり蓋然性の高い第二案である。

しかし、あえて指摘するならば、なお【C2—2型】の可能性を残しており、また【C2—1型】も完全に否定されたわけではない。いまのところ、拓本資料や調査報告の不備・不足のため、確かな制作時期を特定することは難しい。

(5) 【C2型】の場合。そこで、一歩下がって、ほぼ間違いないのは、「山形大学本」が【C2型】類型に属することである。ところが、同類型の拓本の制作時期の上限はまだ確定されていない。そこで、次善の策として、類型単位の按分比例により、同類型に対応する制作時期を推算してみよう。

まず、初めに【C1—3型】拓本が出現した一九一二年前後を上限とし、【C2—1型】拓本から【C2—2型】拓本を経、【C2—3型】拓本を制作し始めた一九二五年前後を下限とする。その間に三類型が継起し、足かけ一四年が経過した。即ち一類型当たり平均は約四・七年間（約四年八か月間）となる。これにより、【C2型】拓本の制作時期は、【C2—3型】拓本をも含めて、おおよそ一九一七年前後から一九三五年前後まで、大略二〇年前後の期間と推定される。可能性を最大限に想定した第三案である。

六、「山形大学本」の性格（結語）

⑴　「山形大学本」の類型について。「山形大学本」を石灰拓本「着墨パターン法」と照合し、第Ⅲ面のポイント④⑤⑥について照合して、当該拓本は典型的な石灰拓本の【C２型】類型に属するものと判定した。

また、拓本の用紙法を調査して、基本用紙が一辺52センチの正方形であること、一面が一一段で構成されること、第Ⅲ面の「*論」字〔Ⅲ02―19〕が通時的にかつ共時的にかなり独自の字形で拓出されたこと、石灰の剥落に対応して独特の小白点が増えたことを指摘した。以上の所見を総合して、当該拓本は重ねて【C２型】類型に属すると判定した。

さらに、その【C２型】類型のうち、当該拓本は【C２―３型】類型の可能性がかなり高いことを指摘した。ただし、厳密にいえば、必ずしも【C２―２型】類型の可能性を認めないわけではなく、また【C２―１型】類型を全く排除するわけでもない。

⑵　拓本の制作時期について。「山形大学本」は【C２型】類型に属しているので、一九一七年前後～一九三五年前後に制作されたと推定される。なかでも、かなり可能性の高い【C２―３型】類型とすれば、制作期間は一気に縮まって一九二五年前後～一九三五年前後と推定される。さらに、【C２―３型】類型のうちで、製作技法の酷似する「梶本益一本」とほぼ同じ時期とすれば、一九二七年頃に特定されるであろう。

⑶　拓本の使用について。本年九月、「山形大学本」上部の軸装部分に、わずかながらも破損箇所がみうけられた（その後補修済み）。およそ数十年以前に使用した痕跡かと思われる。そのことから、教育用掛図として実際に使用された時期があったと想定される。

附、参考文献

長　正統「九州大学所蔵好太王碑拓本の外的研究」（『朝鮮学報』第九九・一〇〇輯、一九八一年七月）

横山昭一「目黒区所蔵拓本の採拓年代と外的特徴」（『目黒区所蔵高句麗広開土王碑拓本写真集』、目黒区守屋教育委員会郷土資料室編集・発行、一九九一年一一月）

武田幸男著『広開土王碑との対話』、白帝社、二〇〇七年

武田幸男著『広開土王碑墨本の研究』、吉川弘文館、二〇〇九年

武田幸男「広開土王碑「多胡碑記念館本」調査報告（改訂版）」（新羅史研究会、二〇一一年九月）